

ハッチに降りようとした途端、頭から白い粉をぶっかけられた。これはアメリカ軍が持ち込んだというD Tの粉末であった。

出発して二日目の午後、ついに懐かしい祖国日本の陸地が見えた。船はやがて静かに舞鶴港にすべり込んだ。信濃丸の周りを小型ランチが走り回った。その船尾にはアメリカ国旗が翻っていた。

秋雨の 若狭の湾の 星条旗

一九四八年九月二十二日、私は生きて祖国に上陸し、一歩一歩、大地を踏みしめた。

わが青春

広島県 桑田 四郎

○昭和十六年三月八日 十六歳。満州開拓青少年義勇軍に応募。

茨城県東茨城郡内原訓練所入所。第二十二中隊。
(広島県郷土三個中隊の一つ。高瀬中隊第二小隊

Ⅱ当時の加茂郡出身)

○昭和十六年四月二十九日 満州国北安市鉄驢県満州開拓青年義勇隊鉄驢訓練所入所。第二中隊
同年五月二日 農具舎係となり専従

同年五月 中学講義録(①正則中学校―現在の正則高校―出版部 ②早稲田大学出版部)を取り寄せ、
②を選び、これの送本手続(含講読金銭)を故郷
(現在の豊田群安芸津町)の母に依頼。以後毎月
二冊の送本、勉学

※1 正則と 早稲田をえらびて 講義録
中学を学びしは 青年開拓義勇隊

同年十月一日 収穫終了、農具舎係休止、根雪降り
始め脱穀開始。衛兵勤務(中隊・訓練所本部)
同年十二月一日 訓練所本部経理部勤務を命ぜられ、
事務担当。經理小隊では第二、三次訓練生と同居。

○昭和十九年三月 三カ年の訓練終了。第四次忠誠広
高義勇隊開拓団(東安省虎林県忠誠村和平屯)入
植

○昭和十九年六月 十九歳。徴兵検査、第一乙種合格

同年九月一日まで虎林街の団弁事処勤務。昭和二十年三月三十日まで団本部勤務

○昭和二十年四月一日 二十歳。牡丹江省温春県温春駅気付温春飛行場（第二航空軍第三十九飛行場大隊佐々木隊）飛行兵として現地入営、新兵二十名のみの教育班、教官―見習い士官、班長―佐長、助手―兵長、計二十三名編成で、教官当番となり、機密教育。（詳細割愛）

○昭和二十年八月六日 広島に新型爆弾投下を知る
○昭和二十年八月九日夜半 ソ連軍侵攻により非常召集、暗闇のなか直ちに戦闘・防衛態勢に入る。十三時すぎ、握り飯の昼食ののち、原隊復帰の命。海林駅に出るも列車の運行まったく不能。同僚と二名、相計りて鉄道線路上を徒歩にて原隊復帰を決意。（他の十八名―新京、敦化など九飛行場の新兵―飛行隊の教育拠点地海林飛行場に引き返したのか、一切不明）

一、ソ連軍侵攻時における死からの脱出

牡丹江市爆撃さるを見て奮い立つ

鉄路を牡丹江駅に向け東進。牡丹江鉄橋を渡り、牡丹江駅構内を過ぎ鉄路の両側に連なる牡丹江市街を抜けたところで、ソ連爆撃機の撒く紙ビラの上空に舞うを見る。しばらくし、ドドーン、ドドーンと牡丹江市街に爆煙が上がる。原隊復帰へと奮い立つ。

鉄路による迂回路をやめ直線コースをとる

牡丹江駅を起点にゆるやかなU字型の鉄路の右端が温春駅であり、この直線中間点に現在の牡丹江飛行場当時の第三十飛行場大隊があることを入営時と海林派遣時の車窓から見知っていたので、同僚の新兵と計って、鉄路を外れ南進し、第三十飛行場を突き抜けて一刻も早く温春の原隊に復帰しようと丘陵地の草原に踏み入った。

機銃掃射に立ち向かい九死に一生を得る

第三十飛行場の格納庫を右に見ながら滑走路を通り抜けようとするころ、三機の小型機が近づく。友軍機かと思いきや、ソ連戦闘機であった。さて、どうしようかと二人は顔を見合わせ、二手に別れた。ソ連機は

急降下しながらバリバリと撃つ。パツと伏せる。耳元の草地にブスブスと音を立て通り過ぎ遠ざかる。見上げると二機目が急降下してくる。その高度、方向を見計らいながら左に右に走り回り、また逆走して、照準面積の広がりを見て、位置の停止を避け、伏せることをしなかった。このようにして二番機、三番機の機銃掃射をかわす。三機が入れ代わり立ち代わり急降下しては撃ってくる。たつた二人の日本人を射殺するのにこれほど執拗な射撃を試みる必要があるのかと思うほど、三機は三度、四度と攻撃を繰り返したが、やがて飛び去った。

同僚も無傷であつた。お互いの無事を喜び合うゆとりもなく、ただひたすらに原隊をめざした。

海林での迎撃態勢は温春で撤退態勢に急変

海林駅から牡丹江まで二十数キロメートル、牡丹江から原隊温春飛行場まで三十数キロメートル、計約六十キロメートルも歩いたであろうか。海林駅を十四時半に出発したとして、途中、機銃掃射による道草の時間を加え何時間歩いたのだろうか。五分後の到着であ

つたとすれば、原隊はすでに通信に向け撤退していたであろう。状況は切迫の極限にあつた。

○昭和二十年八月九日夕刻 時刻不詳 原隊に近づくころ数機の練習機が、あちこちの上空を舞いながら、ゆっくり、キリキリ回つては見慣れた西の河（松花江支流の牡丹江）向こうの山腹に墜落してゆくのを目撃した。不思議に思つていた練習機のことを整列し居並ぶ古兵に聞いたところ、操縦桿をひもで縛りつけ、エンジンを始動し飛び立たせた……内地から移駐していた航空士官学校（三十九、三十、海林の三飛行隊分駐）生は最後に残つた数機の実戦機に搭乗し、格納庫と滑走路を爆破したのち飛び去つたと……、なお、昭和二十年三月中までに飛び去つた実戦機（台湾、沖縄戦の中継地九州）は帰つてこなかったなど、複雑な心境で撤退を待っていた古兵は話してくれた。

原隊復帰を佐々木中隊長に申告してから間もなく、東のなだらかな山すその隧道爆弾庫の自爆による爆破が大爆音と共に空高く飛び上がった。こ

の破裂・破壊音は地響きを上げ鳴り続いた。一方、兵が各隊舎ごとに周りを駆け巡っていたが、この姿が見えなくなると、隊舎全棟同時に火炎を上げ赤々と燃え上がった。予想だになかった撤退。

原隊の撤退直前の後始末の悲愴を語るに忍びない。

原隊は火の海を後方に、各種自動車に分乗し撤退開始、東京城方向に南進。

○日時不詳 東京城城壁を右に見、鏡泊湖北端に向き南進・登坂。貨物車、燃料補給車、航空機始動車など各種自動車はすべて後輪駆動で、必需物資を満載、しかも雨後のぬかる登坂路では前進力なし。分乗の全員は降車し、自動車を押し歩き、登坂力を助く。

撤退の諸種部隊、開拓団ら日本人の列は、自動車、馬車を優先に登坂路の両脇に陸続。いずれも背に、肩に、両手に荷物多く、あえぐ。登坂路脇に一つ、また一つと荷物をそと置いては坂を登って行く。わが原隊もついにかなわず、不急不用物資を自動車から降ろし積載量を減らす。このこ

ろのこと、添田知道著「教育者」を見つけて拾う。
※2 教師の道 歩ましむ因は「教育者」三冊

鏡泊湖へと撤退の 登坂路脇に拾う

○日時不詳 鏡泊湖北端にたどり着き、原隊の将校らの家族は上陸用舟艇で鏡泊湖南端に行くことになる。この家族の当番兵として上等兵、一等兵にまじって、新兵二等兵ただ一人、私は営外曹長の奥さんの当番兵に選ばれる。南端で上陸したところ、将校家族は先行の東京城飛行隊の自動車群に同乗し、教化飛行隊で原隊将校を待つことになる。この旨を原隊に知らせるべく家族当番兵を解かれた一等兵と二等兵の私二人、鏡泊湖東岸を北進し、南進の原隊と合流す。

○昭和二十年八月十五日 鏡泊湖南端に間近い東岸において終戦のラジオ放送を聞く。

陸軍幼年学校・士官学校出の若い中隊長の「脱走してくれるな」の訓示の後、一階級特進の報ありて星印一つ手渡されるも、「戦争に負けて星をもらいたくない」の私の声に、軍曹になった元伍

長の班長大いに怒り、両頬を殴る。私の顔面は丸くはれ上がる。

○昭和二十年八月十六日早朝 元新兵二十名班の班長

(伍長)、助手(兵長)、教官(学徒動員によるらしい若い見習士官)その他、計数十名の脱走あり。

○昭和二十年八月二十日前後頃 鏡泊湖南端と敦化の

沙河沿飛行場との中間あたりで武装解除。

※ 敗戦時に 文房具もすべて 武装解除さる

悲憤の歌詞を 亡失し帰国す

武装解除と同時に、わが飛行隊の全将校、ソ連軍に連れ去られる。少尉の襟章を付けなかったのか営内准尉を最高に、下士官、兵のみの集団となつて沙河沿飛行場に連行される。

○昭和二十年八月二十日以後のことか、沙河沿飛行場

の草原に各人携行の携帯天幕を数名ごとに綴り張つて、臨時収容所とする。

後日、作業なしの日々続く。この間、何回もの持ち物検査を逃れ得ていた「教育者」三冊を読する。

抑留生活の始まり。(男装女性などの悲憤の詳細割愛)

○昭和二十年九月 ダモイを信じ脱走せず、徒歩にて

撤退路を逆戻り↓鏡泊湖南端↓東岸(左方眼下に水あり。のど乾くも、連行監視ソ兵、水際に降りるを許さず。馬糞の溶けかけた水を、轍に這いつくばり、くちびるをとがらせ飲む)↓鏡泊湖北端↓東京城に向け坂を降りる↓東京城郊外

※ 牡丹江へと 捕らわれゆく道中 東京城外に

開拓団らと遇う 流民の鉄条網

※ 有刺鉄線にとりすがり叫ぶ 老婦 子女

兵隊さん がんばつて と 兵の列励ます

東京城郊外↓温春↓牡丹江

○昭和二十年十月 穆稜寄りの掖河収容所。

六十五歳の平成二年に「満州開拓訓練所」跡と「義勇隊開拓団」跡を表敬訪問した際に、四十五年前、二十歳当時に牡丹江周辺を訪ね回った地名、地点を紹介する。①海林街 ②牡丹江西陸軍病院―民間日本人収容所―昭和二十一年帰国 ③牡丹

江東陸軍病院―関東軍関係収容所の一つ―シベリア抑留―掖河収容所 ④第三十―牡丹江―飛行場

⑤温春街 ⑥第三十九―温春―飛行場

○昭和二十年十一月 ソ連軍による「ダモイ」「ダモイ」にだまされて、ついに綏芬河經由、入ソ。

○昭和二十年十二月 タイセツト第七収容所地区第十分所。冬期Ⅱ一、二等兵、開拓訓練生などの若年者は伐採、枝打ち、搬出。五年兵の古兵など有技術者は丸木小屋の木組み工作。夏期Ⅱ有技術者などの古兵指揮のもとに、大型丸木小屋の組み立て、建築。

○昭和二十一年不詳 驚くほど早い時期に、日本共産党員によるハバロフスクでの編集・発行の日本字「日本新聞」が数名に一部の割で配布開始さる。

※3 教師の道 歩ましむ決意は 日本字新聞
教師のだから説く 日本敗戦九カ条

二、シベリア抑留時における第一の死を脱出

○昭和二十一年十二月二十九日夜半 高熱にうなされ、

悶え苦しんだのか、不寝番に背負われて医務室(第十分所は、炊事と入浴を除いてすべてドイツ軍製の二重張り幕舎)に入室。運よく直ちに便意を催し、便座(鉄鑪訓練所、虎林の和平屯、温春、海林で一回の入室・入院もなく、オマルを全く知らなかった)に尻をおろすやいなや激しくピーピーと噴出。少食、空腹の腹中のすべてを排出したのか、早朝、毛布にくるまれて、リンリンと馬ソリにゆられて行きつつ、次第に意識不明となる。

○昭和二十一年十二月三十日早朝 日本人(第三)病院入院。

回復期に「急性肺炎」と知らされる。意識不明中のことも、聞いてみた。

①十四日間、大いに「うわごと」言うを見て「ああこんな、もう死ぬのか。あのベッドは死のベッドだ」と。

②狂ったように言う「うわごと」は「何と言っていたか」「何と言っていたのか、大きな声だったが、早口で言うのでよく聞きとれなかった」

と、不得要領。

九死に一生を得た意識回復直後のこと。

① 急ぎ炊きあげ衛生兵の差し出すスプーンの重湯を一口入れ、これを激しく吐き出す。(衛生兵の知らぬはずはなからうに、塩味であったのか)

② 衛生兵急ぎ炊きかえ持参する重湯を食す。(味なし粥―第三病院初の大重病者回復する)

③ 第十分所医務室で腹中のすべてを出した体質は、急性肺炎と苦闘したあとの体質も同じだった。意識不明中の十四日間、一回の排尿、排便もしなかったと確信す。

○昭和二十二年五月 タイセツト市のOK(栄養失調軽作業) 収容所。ソ連軍少将官舎当番など。

○昭和二十二年八月 第十九分所。夏期伐採中の蚊にやられ、第一回目マラリア罹病。

○昭和二十二年八月 日本人(第二)病院入院。キニ―ネあり服用、回復早まる。

ソ連軍女将校たちの仕組んだ誘惑から脱する。

詳細割愛。

○昭和二十二年十月 第十九分所に復帰。バム鉄道敷設地側溝掘りⅡまきを焚いては掘り焚いては掘って、この土を敷設地に盛り上げ、砂利、まくら木、レールを敷く。

○昭和二十二年十二月 不整脈三拍一休、低体温三五四・二度Cを知ったのはこのころか。官舎当番の軽作業に従事。

○昭和二十三年二月 第二十二分所、作業なし栄養失調収容所。

※ あの空の 彼方のもとに 祖国あり

思い出は繁く 身は遥かなり(現地にて)

※ 4 不法なる ソ連の侵攻と 抑留なくば

つとに祖国踏み 勉学はかどりに

※ せなを曲げ 鼻水たらし あご出して

とほとと歩む 収容所の日本人

※ 突然に わめき飛びはね 首 手 振り

狂い死にせし 収容所の日本人

○昭和二十三年七月 半湿地帯の木道を東進のトラッ

クに分乗し、百二十四キロメートル地点、ウラウダ河西岸の白樺林の中でマラリア再発。

三、シベリア抑留時における第二の死を脱出

関東軍の持参していたキニーネ、すでに皆無か。発作の後、次第に意識不明となる。

① バム鉄道西端の起点タイセツトに向け後送西進の幾日、シベリア鉄道を帰国東進の十幾日、帰国拠点のナホトカでの意識回復までの約二十日間近くの間、死なずに他の病弱者と同等に一人前に寝起きし、飲み食い、しゃべり、大小便もしたであろうに、不整脈と低体温のなか無表情な夢遊病者のように起居したさまは、まさに生けるしかばねのごとくであつたろう。または、現在でいうところの脳死状態から迫りくる心臓死に、幽鬼のごとき容姿であつたのか。

② イルクーツクでかハバロフスクでか、おそらくタイセツトでのこと。「ダモイ」用新衣服などの支給時に何秒か意識回復、「またまたダモイで気を

持たせるのか」と見れば、昭和十七年ころ満州開拓団青年義勇隊鉄驢訓練所庸員の林業伐採班と運搬班員に支給着用させていた夏物満服の上下であった。ソ連は満州各地区各所からすべての物資を運び込んでいたのか。

③ バイカル湖の夏の風物詩「帆かけ舟」で網を引き漁をしていたのは、意識もうろうか。

④ ナホトカ駅着で意識回復。だが、下車したと思う列車前に整列して、若いソ連軍将校の輸送指揮官の話「お前らはきつと敵討ちに来るだろう」の目の前に見たのは客車。しかし、後年のこと、拓友に話すと「当時でのこととて客車があるはずがない」と。今だにもうろう。

⑤ 帰国用収容所第三か第一かは不明だが、わが義勇隊開拓団和平屯の拓友一人を見つけ、言葉を交わす。温春飛行隊第十分所の人とはついに会うことなし。

⑥ 渡満前後にニュース映画で見たことのあるヒトラーユーゲントのごとき、顔色良好、容姿端麗、動

作活発、発言激烈たる日本青年男女のなす帰国用
思想総点検。苦々しい模様など割愛。

○昭和二十三年八月 永徳丸にてナホトカ出港。

○昭和二十三年九月一日 舞鶴入港。早朝「日本が見えるぞ!!」の声に全員大急ぎで甲板に上がる。ポロポロと涙があふれて止まらぬ。近づく舞鶴港にいつまでも立ちつくす。思い起こせば、昭和十六年四月二十五日正午門司出港の渡満時に流した涙、福岡県、山口県の山々の見えなくなるまで甲板に立ちつくしたことを。全く意味が違う。

午後、MPに呼び出され「日本語新聞の編集に携わったろう」と責めたてらる。以下割愛。

夕刻か、MPに責めたてられて援護局の宿舎に帰ってすぐだったか不明だが、三度目のマラリア発作。舞鶴国立(旧海軍)病院入院。

○昭和二十三年十月一日 帰郷。

四、帰国後における死からの脱出

○昭和二十三年十一月 まぶたのただれと眼球の激痛

に苦しむ。

帰国数年後のこと、何かで「食べて食べて、一カ月も腹を下しているのにまだ食べていた」と帰国後の健康状態を語った母(昭和六十年四月一日九十二歳没)の言葉を思い出す。よく食べさせてもらったお陰で、ばかんと平たく開いた醜い尻が少しずつふくらんできた。やっと体力の回復の見え始めたころ、涙のように流れ止まらぬ薄い目やにが出だした。その目やにで目じりからだれて、まぶた全体に広がった。朝の目覚めには半乾きの目やにで目が開かれなかった。指先につばをつけては何回も軽くなでては目やにを溶かし、ゆつくりとまつ毛を傷めずに目を開けたものであった。まぶたのただれの頂点らしいあたりから徐々に目やにの量が少なくなっていく。だが、今度は逆に次第に眼球が乾いてきて、せわしくまばたきせねばならなくなつて、乾きのひどいときはジーンと眼球に痛みが走る。じつとしばらくは目を閉じ、眼球の湿ってくるのと同時に痛みの止むのを待た

ねばならなかった。何かのことでどうしても太陽光線の方向に向けねばならないときなど、まぶしくて、とうてい目を開けてはおれないのである。

目やにの出るのと眼球の乾燥するのは交互に襲って来ては去って行ったが、眼病ではなかったらしい。生死の境から生の方へ傾いた証としての生体の苦しみが目に集中したのである。

医学者でも心理学者でもない者にとっては推測、追憶しかできないが、シベリア抑留者の極悪粗食、少量の食べ物から、青少年時代まで食べ慣れた祖国日本の味、生家の母の味、食べただけ食べられる腹中の加減さに慣れ戻すには、それなりの個人差に応じた期間が必要であつたのか。あれほどに想い慕つた祖国日本、母のもとに帰れての安堵感、「死んでたまるか」と緊張した緊張感と弛緩とのバランスのとり方のむつかしさは、「帰国後しばらくして死亡した」という拓友のことなどを聞き、知つたのは後年のことだつた。

五、旧学制と新学制のはざま

○昭和二十三年九月初旬 父と弟、舞鶴に面会に来る。

弟は広島高等工業専門学校（現在の広島工学部）の学生であつた。長兄は昭和十五年一月、二十一歳で入営後、シンガポール攻撃中に負傷、傷痍軍人として帰還。軍隊生活での低学歴をいたく悔やみ、父を説き伏せ弟に勉学を推奨したと、後日に聞き知る。

○昭和二十三年十月一日 不幸を詫び、孝行を誓う。

舞鶴より京都駅を経由し、九月三十日夜、呉線の東起点糸崎駅着。翌朝始発までプラットホームのベンチに横たわる。少々寒かつたが、シベリアのことを思えば幸せいっぱい。

故郷風早駅に降り立つたところ、兄とばったり。

「四郎!!」「あにやん!!」と、しばし絶句。連れ立って約二キロメートルの生家に戻つたところ祖母が庭に出てきた。「四郎が戻つたところの兄の声に祖母がびっくり、祖母と私は同時に強く抱きついてた。そして互いに「わーん、わーん」と

泣き続けた。気がつくとも母が傍らに立っていたので母に抱きつく。母もしっかり抱きしめてくれ、二人は大声で泣き続けた。言葉は要らない。「行かんてくれ」を振り切り満州に行って五年、日本敗戦から生死不明三年の計八年……家に帰ったら抱きついて泣いてやろうなど思いもしなかったのに……。以下割愛。

私の青春、満州開拓の初志貫徹（第一の人生）は、祖国日本の敗戦によって空しく消し去られた。その上にシベリア抑留の負の遺産を積み重ねられ、これを背負うて、青年前期に渡満してから八年目、青年後期の終期に気力、体力ともに氣息奄々で帰国した。

(一) 負の遺産とは

- ①抑留期三年一カ月、二十歳から二十三歳。不磨の宝石は鈍る。
- ②抑留期間中終始した極悪食糧、少量による栄養失調。
- ③抑留冬の極寒による急性肺炎、抑留夏の酷暑

によるマラリア二度（②と連動し不整脈と低体温）

(二) 夏の遺産の回復・復帰の難易度―軽度ゝ難度順

①栄養失調―健康管理に注意を要す。

②不整脈・低体温―二十二年末から二十三年ごろまで約十年間継続。

③抑留期間中の頭脳停止を学業に向け開始、学業復帰の至難さ。

消し去られた第一の人生（満州開拓）、しかもシベリア抑留の絶望のふちにあつて私を差し支えてくれたものは、本文中の短歌（※1ゝ4）であつた。生きて帰って教師になろう（第二の人生）と立志したことによると信じたい。

祖国日本に帰国したときのこと、舞鶴港の上陸棧橋、東海道線乗り換えの京都でかけられた「お帰りなさい、抑留御苦労さまでした」の心のこもった言葉に、本当に日本に帰ったのだと有り難かつた。このお互いの気持ちを通じ合い、今の日本があるのだと信じたい。